

巻頭のご挨拶

一般社団法人 北海道林産技術普及協会
会長 高橋 範行



会員の皆さま、新年あけましておめでとうございます。2021年の新春を会員皆様とご一緒にお慶び申し上げます。

2020年1月16日、日本国内で初の新型コロナウイルス感染症（以下、「新型コロナ」）患者が確認されました。それからちょうど1年になります。激変、の1年でした。いえ、でした、という過去形はふさわしくありません。新型コロナへの余儀ない対応はこれからも続き、社会の激しい変革は止まることはない・・・そう考えて明日に対処するべきであることは言うまでもありません。昨日から続く今日、今日の延長上にある明日、ではなく、「見知らぬ明日」への対応が求められています。ですが、「見知らぬ明日」の状況に置かれたのは今回の新型コロナに限ったことではありません。過去を振り返ると、私たちは何度も「見知らぬ明日」に遭遇し、力を尽くしてくぐり抜け、そしてたくましく生き延びてきたことに気づきます。少なからぬ企業が生き延びてきたことの一例が、「長寿企業」「百年企業」「老舗」と言われる企業群の存在です。

わが国には、創業100年以上の企業（以下、「100年企業」）が2万数千～3万社あります。この中には個人商店や小規模な会社は含まれておらず、それらを含めた100年企業は10万を超えていると言われています。また、創業が江戸時代にさかのぼる200年企業は3千社以上、500年企業は少なくともはありますがそれでも100社前後はあります。さらに、聖徳太子の時代から1000年以上続いている、世界一の長寿企業が日本にはあります（野村進著「千年、働いてきました」）。創業が100年以上前と言うことは、敗戦も、バブル崩壊も、リーマンショックも、全てくぐり抜けてきた、ということになります。100年企業、200年企業の数是世界の中で日本が最も多くを占めています。北海道について言えば、蝦夷地が「北海道」と命名された1869年から153年経った現在、道内の100年企業は約1千社にのぼり、その数は全国で8番目の多さになります。1千社の中には、もちろん木材関連企業も含まれています。

これら長寿企業は、本業を守り抜いている企業もありますし、培った技術や知見を元手に異分野の知識を重ね合わせて新しい分野に活路を見出して変身した企業もあります。後者は、資源、需要をはじめとする時代の変化に対し、柔軟に、慎重に、細心に、果敢に、迅速に、大胆に対応してきたからこそ、長く生き続けられてきた、ということなのだろうと思います。これら長寿企業の存在は、これからも続くであろう新型コロナに対応していかなければいけない困難な時代において、今日まで存続し、そしてこれからも存続する私たち企業に対する励まし、エールとして感じられます。

さて、昨年、林業・木材産業に目を向けると、素材生産量、製材生産量、新築住宅着工戸数の減少が統計として示されています。この中で、新築住宅着工戸数の減少は、我が国の人口が減少の方向にあるため、新型コロナが登場する以前から想定されていたことでした。そのため、以前より住宅分野での木材需要減を補う分野として非住宅建築物や土木での木材利用が進められてきたことはご存じのとおりです。昨年の当協会誌「ウッドエイジ」では、非住宅建築物については、例えば「ひまわりの花びらをイメージした保育所（5月号）」、「中大規模建築物の木造化をサポートします（10月号）」、「道産木材と地域の技術で建てる図書館（11月号）」、土木については「地域材の価値を高める（11月号）」、「杭丸太による地盤改良（12月号）」など、道内における具体的な取り組み例を紹介してきたところです。

また、4月に予定している今年の総会後の講演会においては、新型コロナがある程度収束の見込みがたつていくことを期待し、非住宅建築物における木造化のさまざまな具体例をご紹介いただくべく、(株)竹中工務店の小林道和氏をお招きしています。大手ゼネコンによる先駆的な木材の使用実例は、私たち森林・木材を基盤とする産業に携わる者にとって大いに参考になることでしょう。そしてさらに、「革新的なイノベーションを通じてグリーン社会の実現を目指す（2020年11月、G20サミット）」という我が国の、そして世界の大きな方向性の中で、林業・木材産業の将来性に対する確信を深められる機会となるに違いありません。

当協会は今年も林産試験場と企業の架け橋として、木材加工技術の向上とその普及に向けた活動を進めて参ります。皆様のご支援・ご協力を心からお願い申し上げます。